



「ただいま帰りました。」

アイシヤの自宅のドアが開き、カルミアが買い物から帰ってきた。

アイシヤ宅では来た時は「ただいま。」
帰る時は「また明日。」

と言うルールがある。
とはいえ来た者全てに強いてるわけでは無いので、
なんとなくアイシヤ達3人での
軽いルールになっているだけなのだ。

「ルミアさんおかえりなさい。」

それに倣っていつものようにレントが
カルミアを出迎える。

「レンちゃんただいま。
? アイシヤはどこかしらっ。」

「かるみあ、

おかえりー!」





「.....」

.....



「おっと!、へへへ、
ルミアさんどうですか、驚いたでしょ?。」

「…あれ?。」

カルミアの手から買い物かごが落ちるが
それを予測していたのか、
レントが見事にキャッチする。

「え〜つと、ルミアさん、お〜い!
ん〜つと…あれ?。」



「……!!? つえ、先輩!!
なんかルミアさんから煙出てる!
変な音もしてる!
大丈夫なんですかこれ!」

「いや、こんな反応初めてみた!
ごめんカルミア落ち着いて!
冷静になつて!!」
あたしここに居るからっ!!」



「これはマズイ、リイムごめん元に戻ってお願い!。」

「はっ。」



そう返事した
アイシャによく似た少女の体が
グニャグニャと形を変え、
リイムと呼ばれた少女に姿を変えた。

イリム



「…もう、本当に驚きましたよ。」

「悪いわるい、でも凄いでしょリイムの擬態能力。」

「確かに纏うエネルギーまで再現出来るなんて、とてつもないですね。」

アイシヤが仕掛けたドッキリでカルミアが壊れかけた緊急事態から大分経った頃、復帰したカルミアは夕飯の調理を始め、反省のつもりでアイシヤがそれを手伝う事になった。

「でも突然こんな所にあんな可愛い娘がいるって。」

「私がもう少し冷静だったらすぐにさらっ…。」

「を洗いながら保護する所でしたよ。」

「…お前は冷静だと随分器用に犯罪に手を染めるんだな。」

「保護ですよ、何もやましい事はナイデスヨ。」

「それであすみが前に立っちゃった?」

「うん、あの娘がリィムだよ。」

「うううう展開も随分と久しぶりな気がしますけど、
今回はどうやって説得したんですか?」

「えっ!?! えっと...あっと...」

「はあっ♡、ああ♡、んふぁあっ♡♡、ああっ♡♡♡♡。」

アイシヤは騎乗位の姿勢で自ら腰を振り、スクインの触手男根を啜え込ませている、弱点の両腋を晒す無様な姿勢で、上半身と両足はスライムラバーに包まれ内部でその肢体を弄ばれていた。



マーゴ、スクインと因縁あるスライムにアイシャが捕らわれ
およそ2日が経った。

アイシャを苦しめたタロスに張り付く肉腫は
今は別の肉腫に取り換えられている。

また侵食粘液はスクインをしてこれ以上は必要無い、
と言わせるほどにアイシャの子宮内に注がれ続けた。

更にはボディハックの効果を増強する

デバイスが手足と首に追加され、
アイシャの体はアイシャの意思では自由にならず、

スクインに操られるまま
彼女の体は望まない快感を受け入れさせられ、

そのエネルギーをスライムとスクインに
吸い取られ続けていた。

「んあっ♡…はぁん♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あぶあ…♡♡♡♡」

アイシヤを包むスライムラバーが
アイシヤのエネルギー色に光り、それが繋がっている
本体に吸い出されていく。

（ああ、このスライム、なに…？、
こんなふう…♡♡♡♡されびやう、
らめなの…♡♡♡♡きもびよく、なっへえ…♡♡♡♡）

とけ…♡♡♡♡ひやう…♡♡♡♡

マーゴのエナジードレインはその性質上
必ず快感を伴うものである。

アイシヤも幾度もエナジードレインをされてきた経験があり、
多少の事では意識を奪われない自信があつたのだが
このスライムのドレインは何かが違う。

男性寄りな性格のマーゴのドレインは色んな手段を使い、その時吸えるものを手あたり次第に貪り喰らう様な直接的で乱暴なものが多い。

女性寄りな性格のマーゴのドレインは様々な手管を使い、たとえ堪えていたとしても、次第に外堀を埋め、期が熟した時に抗えぬ快楽と共に吸収するものが多い。というのがアイシヤの経験則だ。

前者は乱暴故に短時間で事を済ませようとするため、快感に意識を奪われにくく耐えきれば反撃のチャンスも生まれやすい。よしんば反撃が無理だったとしても、行為が済んだ後、放置して去るものが多い。

後者はその外堀を埋めるまでに必然的に時間を要する為、その間にいくらかでも反撃の機会を見つける事が出来る。だが外堀を埋められてしまうと快感に対して抵抗出来なくなる。最悪住処に連行される可能性がある。

アイシヤはどちらかという、後者の責めの方が苦手だった。

しかしこのスライムのドレインはどちらとも異なり、
アイシヤの体を優しく探り、気持ちよくなるポイントを見極め
エネルギーを吸い取ってくる。

そこにはマーゴ特有の相手を餌や食材と想っているような、
悪意が感じられず、むしろ愛情すら感じられる程だった。

ただ、スライムのドレインする力が強いのか、

アイシヤの今の状態が影響してか、

与えられるドレインの快楽が凄まじく、

容易く激しい絶頂に見舞われてしまうのだが、

そうなるスライムはドレイン量を弱め的確な塩梅で

激しい快感を心地好い快感と上手く混ぜ合わせるような動きを始め、

その刺激にアイシヤは身も心も蕩けさせられてしまっていた。

「でもなんか苦しそうなんだけど?。」

「強引にだから……な、
体を酷使するから多用は出来ない……が、
後で休ませればいいだ……ろ……う。」

「ふん、ボクはあまり好きなやり方じゃないな。」

「後で休ませると言っているだろ……うが、続きをはじめると……ぞ。」

無理矢理エネルギーを絞り出すようなやり方に
あまり納得していない風だったスライムだが。

「ボクがもっと気持ち良くしてあげればよいよね。」



ギョッ
ギョッ
ギョッ

「んあっ！あががっ！グッ！なっあああっ！」

ガボガボ

グッ

ガッガッ

ムプムプ

棘の先端がタロスに食い込むと棘はドリルのように高速回転を始める、タロスにはビビが入ると同時にアイシヤの体に激痛が迸る。

「んあああつーいな、ぐあああつーい、あああああつーい！」

ドリルが少し食い込む度にタロスのビビが増え、その度にアイシヤの体に走る激痛は加速度的に大きくなり、先程までの悦楽が吹き飛んでしまっていた。

「ちよつと、なにしてるのさ！」

「仕上げだ！、俺をバカにした連中に俺の才能を！、力を、見せつけるのだ！！！！！」

ドリル触手の背びれのような部分が発光する、その発光は、根元から二つ、また二つとドリル本体に近づくように発光していく。

「あぐああー！ぐあひー、あああひー！」。

「この発光がニードルに到達した時、タロスは碎け、マールゴハシのタロスは死ぬ、それを今から証明するのだ！！！」



ガクガク

シブシブ
シブシブ

「ちよつと、…話がつつ！違うつつ！！」。

あの頃は自分がどう死ぬか、殺されるのか、死ぬよりもひどい目に合うのかも等、考えてもどうしようもない事を考えすぎてそれが頭の中でグルグルと巡り、時には眠れず涙に枕を濡らす日もあった。

あの頃は自分がどう死ぬか、殺されるのか、死ぬよりもひどい目に合うのかも等、考えてもどうしようもない事を考えすぎてそれが頭の中でグルグルと巡り、時には眠れず涙に枕を濡らす日もあった。

「これ、走馬灯つてやつかな？」
昔の事を思い出すなんていよいよだなとだが何故かどこか冷静になつてしまう。

アイシヤは自分がこういう仕事を
している以上、こうなる事の覚悟はきちんとなつた。

ただ、仲間が自分の亡骸を見た時に、
無様だったねとか、可哀そうだったね
と思われるような死に方はしたくないと
思っていた。

どんなに悲惨な状態になつていたとしても、
あの人妻かつたねとかとにか、良いイメージで
思い出してもらえるように逝こうと
心に固く誓っていた。

だから目の前のスライムが何をしてこようが、
絶対にその矜持は貫く、
そう決意し動けぬ体でスライムを睨みつける。

そんなアイシヤにスライムが近づくと、

スライムはタロスに手を伸ばすと、

「大丈夫？、ごめんね、これ苦しかったんだね。」

アイシヤのタロスに張り付けられた肉腫を
剥がしてくれたのだつた。

「なんか体冷たいね。寒い？、ボクが温めようか？」

「あ、いや大丈夫。
できれば毛布とかがあればそつちがいいかな。」

そう言つて体を広げようとするスライムの行為をアイシヤはやりわりお断りし、なんでもいいから羽織るものをお願いすると。

「分かった！、探してるー！」

と元気のいい返事と共に部屋を出て行つてしまう。

「うーん、これは…どういう事だ？」

スライムはアイシヤに取り付けられたデバイスを全て取り外してくれただけでなく、これまでのダメージで頭が回らず上手く喋れなかつたアイシヤが喋れる位に回復するまで何もせず待つていてくれたのだ。

その謎の行動に、さつきまでの覚悟とか走馬灯やは何だつたんだろうと拍子抜けしてしまふ。

「でも、まだ油断はできないよね。」

だか相手はマIIゴである、ここから何とか戦える方が戻るまでどうやって時間を稼ぐのか、それを考えなばならなかつた。

「毛布あったよ〜ほい。」

毛布を発見したスライムがアイシヤの肩に毛布をかける。幾ばくかの温もりに安心感があったが、冷たくなつた体はまだ震えが止まらなかつた。

「まだ寒い?、
もしがしてエネルギー吸い過ぎちやつたかなあ?」

事実エネルギーの回復がかなり遅い、こればかりは先程までのダメージが原因であり、時間が経てば必ず回復するものではあるが。。。でもアイシヤはなんとなくダメ元で。

「そうだね、
出来れば返してくれたらありがたいかな?。」

そんな事をスライムに頼んでみると。

「うん、分かつた。」

と言つてアイシヤの手を握る、するとそこから先程までスライムが吸い取つたアイシヤのエネルギーが流れ込んできた。

「!?…何考えてるの?。」

スライムの行動にアイシヤは流石に困惑していた、
「マールゴがマールゴハンターから吸い取ったエネルギーを返すなんて自殺行為以外の何物でもない、
だがこのスライムは躊躇いなくそれを行っている。」

「このくらいでいいかな?、
あの…さつきの分を回復したいんだけど」

「…ちよつと貰ってもいいかな?。」

はにかみながらそう言うスライムに
ここまでされて悪意でやつてると疑うなんて
アイシヤに出来ようはずも無く。

「いいよ、そつちは大丈夫なの?。」

と笑顔で応える事にしたのだった。

「ねえっ、あなたのお名前は？」

「…ん？、アイシヤ・エプタだけど？」

スライムから唐突に名前を聞かれ、
まああんな状況じゃあ名乗る事もないよね、
と内心苦笑気味に答える。

「あいしやえぶ、 え〜、えぶ？」

「アイシヤでいいよ、じゃあ貴方のお名前は？」

「ボクはリイム、やつとお名前聞けた！、
アイシヤ！アイシヤ！」

自分の名前を嬉しそうに連呼されるのは
何とも気恥ずかしいが、
その時アイシヤは
夏のあの日に合ったスライムが何故か
自分の名前を聞き出そうとしていた事を思い出した。

（あゝあれはそういう事だったのかなあ…）

あの時は襲われていたからそうは思わなかったが、
もしかしたらこのスライムはあの時ただ単純に
名前を聞きたかっただけなのかもしれない。

そう悟ったアイシヤは俄然このスライムに
興味が湧いてしまい、

これまで何があつたのか？とか、
何がしたいのか？等

小一時間程色々話をし、

アイシヤはある事を決意する。

「ねえリイム、人間との共存、考えてみない？
不安ならあたしが相談にのるからさ。」

「…まあ、色々うまい事いったんだよ、うん。」

「説明になってませんが、まあそういう事にしておきましょう、それで居住調査の方はどうでしたか？」

「うん、問題なし、しかもエリア5で仕事も見つけたってさ。」

マーゴの中には、マーゴハンターに追われる事に耐えられなかったり、偶然人間と良好な関係を築く事が出来た故に人間を襲いたくないという考えに至った者達がいる。

そういったマーゴをアダマンティウス・リベラティオは特別区域を作り受け入れている。

場所是非公開、区域の周辺は厳重な警戒設備が設けられているが、そこではマーゴが生きていくのに必要なエネルギーが支給され、仕事に就く事が可能で、更には人間も一緒に暮らしている。

現在ではルートは限られるものの、そこでの生産品が流通していたりと一つの町として成り立っている場所なのである。

「それは素晴らしいですね。」

「人を襲った事はあるけど、
殺した事が無かったのが幸いしたみたいよ。」

特区の中は5つのエリアに分かれ、
数字が少ない程に警備と監視が厳重になる。

最初に特区に入る者は
まずエリア3で数か月生活してもらい
その間に素行やこれまでの経歴を調べられ、
その結果や生活状況を鑑みて
住むエリアが決められる。

特区入りをしても性格が乱暴な者や、
過去に多くの人間を殺した者は
要警戒者として扱われ、
エリア1や2で生活をする。

なのでエリア5に住むことになるリィムは
かなり良い評価だったという事になるのだ。

「それじゃあ、新しい友達リイムの歓迎と、あたしの勧誘スキルに、乾杯！」

「……」

「……ん？」

カルミアの調理が終わり、皆食卓についたので、アイシャが乾杯の音頭を取るが、カルミアとレントが首を傾げ、頭に一杯の？マークが浮かべている。

「ちよつと、なんで止まるのよ？」

「いやだって、アイシャが前に勧誘に成功したのって50年目でしたよね？」

「はっ」

「違いますよルミアさん、15年前ですっつて。」

「おうむ。」

「アイシャって結構おばあちゃん？」

「んなわけあるか！、

50年前はあだし生まれて無いし、

15年前はレントと出会ってない！、

おまえらあたしの勧誘力をデイスるんじゃない！。

はいー！かんぱいー！かんぱいー！……」

アイシャの強引な乾杯の音頭と共に始まった
リイム歓迎会。

リイムは初めて味わうカルミアの料理に感動したり、
皆でゲームをしたり。

アイシャ達とアドレス交換しようとしたリイムが
間違えて端末を初期化してしまうハプニングがあったり。

折角なので全員で大浴場にいこうとなったのだが、

水とエネルギーがあれば増えるという
リイムの特徴を当の本人が理解しておらず、

アイシャに擬態した時にもらった
エネルギーと水分が合わさり、
4〜5倍に増殖してしまったりと――。

出会いに紆余曲折あったものの、
アイシャにとってもリイムにとっても
友人との楽しい思い出が出来た、

そんな日になったという――。

リィム

かつてアイシャに襲い掛かったスライムの現在の姿。
元は人造マーゴの研究から生まれたスライムだったが、
研究者が問題を起こしたため研究が凍結するがその期間中に
逃げ出してしまった。
その後電気を発する生物と共生関係を持ち、再びアイシャの前に現れた。

事件の後、数か月助人間と一緒に暮らしていた。
その人間に様々な事を教えてもらい、
現在の人型の姿への擬態等も確立した。

非常に高度な擬態能力を持ち、あらゆるものに姿を変える事が出来る、
またマーゴハンター等の高いエネルギーを持つ者に
擬態するにはエネルギーをある程度分けてもらう事で、
姿形だけではなくその者のエネルギーの質も
同じ状態の擬態が可能である。

他者を疑う事が苦手な為、すぐ鵜呑みにしてしまう。
アイシャに教えてもらうまでは
相手に快感を与え気持ちよくする程に仲良くなれると
教えられていた。
(実際はその人間がスライムとの行為にハマり、
スライム中毒の様な状態でリィムにその事を吹き込んだ事が原因と思われる。)

なので食事の為に人を襲う事はあっても
快感を与えるだけで殺す事はしなかったという。
だがそれは吸収したエネルギーの持ち主に対して友愛心を持ってしまうという
リィムの特性が起因しているとされる。

現在はマーゴ特区にて宅配業を営んでおり、
人懐っこい性格とスライムの特性を上手く活用して
評判になっているという。

